

## 2. 麦類

・殺菌剤

FRACコード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M2	イオウフロアブル	散布	発病前～発病初期 注4)	—	
3	シルバキュアフロアブル	散布	収穫14日前まで	2回以内	大麦
		散布	収穫7日前まで		小麦
3	チルト乳剤25	散布	収穫3日前まで	3回以内	小麦
1	トップジンM水和剤	散布	収穫30日前まで	3回以内 (但し、出穂期以降は 1回以内)	麦類(小麦 を除く)
		散布	収穫14日前まで	3回以内 (但し、出穂期以降は 2回以内)	小麦
3	トリフミン水和剤	種子粉衣	は種前	1回	
		散布	収穫14日前まで	3回以内	
M3+1	(チウラム・ベノミル) ベンレートTコート	種子粉衣	は種前	1回	
	ベンレートT水和剤20	10～20分間種子浸漬	は種前	1回	
		6～24時間種子浸漬			
		種子吹き付け処理(種子 消毒機使用)			
種子粉衣					
M3+1	ホーマイ水和剤	6～24時間種子浸漬	は種前	1回	麦類(小麦 を除く)
		種子粉衣			
		6～24時間種子浸漬	は種前	1回	小麦
		種子粉衣			
3	ワークアップフロアブル	散布	収穫7日前まで	3回以内	麦類
M2	石灰硫黄合剤	散布	—	—	
M1	硫酸銅	ボルドー液を調製して 均一に散布する	—	—	

注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。

注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける（「薬剤抵抗性管理」参照）。

注3) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

注4) 登録会社により使用時期が異なるので、登録内容を確認して使用する。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
種子伝染性病 害 黒穂病類 斑葉病	は 種 前	(共通) 1. 種子は無病ほから採種する。  (裸黒穂病、斑葉病) 2. 風呂湯浸法は44～46℃に10時間。 3. 冷水温湯浸法は水浸6時間、温湯50℃に2～3分間予浸後、直ちに54℃に5分間浸漬し、直ちに水で冷やす。  (斑葉病) 1. ベンレートT水和剤20又はホーマイ水和剤の200倍液に12時間浸漬処理するか、ベンレートT水和剤20の20倍液に10分間浸漬処理する。 2. ホーマイ水和剤を乾燥種子1kg当り5g粉衣する。  (なまぐさ黒穂病) 1. ホーマイ水和剤200倍液に12時間浸漬処理する。 2. トリフミン水和剤、ベンレートT水和剤20、ベンレートTコート、ホーマイ水和剤のいずれかを乾燥種子1kg当り5g粉衣する。 3. ベンレートT水和剤20の7.5倍液を乾燥種子1kg当り30ml吹き付ける。	1. 風呂湯が所定の温度になったら火を止め、ふたを3～4cmあけて、順次温度が下がるようにする。 2. 薬剤の粉衣を温湯消毒後に行う時は、日陰干しした後に行う。 3. 薬剤処理後、機械は種を行う場合は、トリフミン、ベンレートTコートの粉衣処理、又はベンレートTの吹付け処理がよい。 4. トリフミン、ベンレートT、ベンレートTコートは裸黒穂病にも有効である。
雪腐病類	根 雪 前 (11月下旬～12月上旬)	1. 4-4式ボルドー液を10a当り200ℓ散布する。	1. 根雪前の麦踏み、土入れは行わない。 2. 品種、は種時期に注意し、耕種的な対策を併用する。 3. 薬剤は麦の上に散布する。
株 腐 病		1. 被害麦稈は堆肥にする。	1. 早播には発生が多い。 2. 暖冬の年には発生が多い。
オオムギ 雲形病		1. 被害麦稈は堆肥にする。	
さび病類 うどんこ病	発 病 直 後 及 び 出 穂 期	1. 石灰硫黄合剤50倍液を発生初期から10a当り200ℓ、1週間おきに2回以上散布する。	1. コムギ赤さび病、コムギうどんこ病の防除は次の欄を参照する。
コ ム ギ う どん こ 病	開 花 期	1. シルバキュアフロアブル、チルト乳剤25の2,000倍液のいずれかを10a当り1500散布する。	1. 開花期1回散布は本病による減収被害を低減できるが、多発生条件下では被害を受ける可能性がある。多発が予想される場合は止葉展開期にも石灰硫黄合剤の散布を行う。 2. 本病は多発すると約20%の減収を引き起こす。 3. 薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一年に複数回の薬剤散布を実施する場合はDMI剤(FRACコード3)の連用を避ける。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
コムギ 赤さび病	開 花 期	1. シルバキュアフロアブル、チルト乳剤25、ワークアップフロアブルの2,000倍液のいずれかを10a当り150ℓ散布する。	1. 本病に対して「ゆめかおり」、「東山53号(ハナチカラ)」は強、「シラネコムギ」、「東山55号(しろゆたか)」はやや強、「ユメセイキ」は中、「しゅんよう」はやや弱、「ゆめきらり」は弱、「ハナマンテン」は極弱。 2. 5月上旬(県内では概ね小麦の出穂期～開花始に相当)に本病の発病が認められる場合は実害が生じる程度まで発病が増加するリスクが高いため、防除を行う。 3. 初発時期、品種に関わらず、シルバキュアの開花期1回散布で効果的に防除できる。 4. 「シラネコムギ」ではチルトの開花期1回散布でも実用的な防除効果が得られるが、「ゆめきらり」、「ハナマンテン」では効果が劣る場合がある。 5. 本病が多発した場合、最大で約35%の減収およびタンパク質含有率の低下を引き起こす。 6. チルトはシルバキュア、ワークアップより残効が短い傾向がある。
赤かび病	開 花 期	1. 石灰硫黄合剤50倍液、イオウフロアブル400倍液のいずれかを10a当り200ℓ、又はトップジンM水和剤1,500倍液、シルバキュアフロアブル、チルト乳剤25、トリフミン水和剤の2,000倍液のいずれかを10a当り150ℓ散布する。	1. 開花期に曇雨天が続くと多発する。 2. イオウフロアブルは高温時には薬害を生じるので散布しない。 3. 散布時期は最も感染しやすい開花期とし、多発が予想される場合は10～14日後を目処に追加散布する。 4. 薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一薬剤の連用を避ける。
コムギ 条 斑 病		1. 被害株を除去する。 2. 小麦の連作を避け、大麦か裸麦を栽培する。 3. 水田に転作する。	1. 早播すると発生が多い。 2. 麦稈堆肥は未熟なものを使用しない。
ハリガネムシ (コメツキムシ類幼虫)		1. は種期を早め、常発地帯は10月上旬までには種する。	

注) 赤かび病の石灰硫黄合剤は製造会社により希釈倍数が異なるので確認して使用する。